

人文・社会科学

問題冊子

指 示

合図があるまでは絶対に中を開けないこと

1. この試験は、資料を読んで、あなたがその内容をどの程度理解し、分析し、また総合的に判断することができるかを調べるためのものです。
2. この冊子は前半が資料で、後半に40の問題(1-40)があります。配点は80点満点です。解答カードには表裏あわせて50の解答欄がありますが、41以降は使用しないで下さい。
3. 解答のための時間は、正味80分です。資料を読む時間と解答を書く時間の区切りはありませんから、あわせて80分をどう使うかは自由です。
4. 解答のしかたは、問題の前に指示してあります。答えの記入のしかたが指示どおりでないと、正解でも無効になります。
5. 答えはすべて、解答カードの定められた枠の中に鉛筆を用いてマークして下さい。それ以外のところに書いたり、また答え以外のものを書きこんだりすると無効になります。
6. 一度書いた答えを訂正するには、消しゴムできれいに消してから、あらためて正しい答えを定められたとおりに、はっきりマークして下さい。
7. メモにはこの問題冊子の余白を用い、ほかの紙は使用しないで下さい。
8. 「解答やめ」の合図があったら、ただちにやめて下さい。試験監督が問題冊子と解答カードを集め終わるまでは、退室できません。
9. この指示について質問があるときは、試験監督に聞いて下さい。ただし問題の内容に関する質問はいっさい受けません。

「受験番号」を解答カードの定められたところに忘れずに書き入れること

(余 白)

1.

1985年の秋、ある古文書の歴史的発見がニューヨークで報じられた。発見されたのは、1639年の印刷といわれる文書「自由公民の宣誓」(Oath of a Freeman)である。1639年といえば、アメリカ合衆国成立のはるか以前のことである。なぜその年が重要なのか。それは、それまで知られていた北アメリカ初の印刷物といえば、ピューリタン教会の礼拝に使われた『詩篇歌集』(The Bay Psalm Book, 1640)だったからである。ちなみに、『詩篇歌集』が2013年に競売にかけられた際には1400万ドルで落札され、書物の競売価格としては世界最高額を記録した。それより1年早く印刷された文書の実物が発見されたとなれば、これは初期アメリカ史を研究する者なら誰もが飛びつきたくするような大発見ということになる。

発見者マーク・ホフマンは、その道ではよく知られた古史料の蒐集家で、特にアメリカ史にかかわる稀観^{きこう}文献を探し出すことに長けていた。彼が手がけたものの中には、エイブラハム・リンカン、ダニエル・ブーン、マーク・トウェインといった著名人の自筆稿も含まれている。こうした掘り出し物には高い史料的価値があり、米国各地の図書館や歴史博物館が購入を願っていた。

報道によると、今回の文書はニューヨーク市内のある書店に雑然と積まれていた古文書の山の中から発見されたものである。ホフマンはそれを25ドルで購入し、次々に専門機関へ持ち込んで鑑定を依頼した。まずは米国議会図書館である。結果は、あくまでも「予備的調査」という名目だが、「歴史に残る世紀の大発見で、17世紀の由来であることを疑わせるものは何もない」というものだった。次いで彼は、古文書研究の分野でもっとも権威のある学術団体「全米古文書協会」へ赴き、鑑定を依頼した。調査の結果、ここでもその文書には「何ら疑念を抱かせるものはない」という太鼓判が押された。こうして文書の由緒正しい来歴が明らかになると、彼はそれに150万ドルという売値をつけて公開したのである。

文書の存在には、歴史的な傍証もある。北米大陸東岸に入植したのは、宗教的迫害を逃れてイギリスから大西洋を渡ってきたピューリタンたちだった。そのなかで、ボストンを中心とする湾岸地域に入植した人びとは「マサチューセッツ湾植民地」を形成した。この植民地の最初の総督がジョン・ウインスロップ(1588-1649)で、その彼が記した詳細な日誌に、ちょうどこの頃のこととして、「自由公民の宣誓」が新大陸で印刷された、と書かれているのである。

この宣誓がどういう内容だったかは、もう少し後になって印刷された文書でわかるのだが、1639年に印刷された宣誓文は散逸し、これまで見つけられたことがなかった。イギリスでは1637年に異端的文書や反政府文書の取り締まりが強化されたため、ピューリタンはその翌年秘かに印刷機を新大陸へと持ち込んでいる。その印刷機で最初に印刷されたのがこの宣誓文であり、その後印刷されたのが『詩篇歌集』である。『詩篇歌集』の方は、いかにも未熟な印刷製本技術の出来映えながら、数冊の実物が現存している。そのため、同時期に印刷されたこ

れら二つの文書の活字が一つ一つ厳密に照合されたが、そこでも異論は出なかった。

2.

ちょうどその同じ1985年の秋、ホフマンが住んでいたユタ州都のソルトレイクシティで、二つの殺人事件が起きる。二人はそれぞれ勤務先と自宅に配達された荷物を取り上げた途端に、手製のパイプ爆弾の犠牲者となった。どちらも水銀を用いた振動感作装置がつけられており、持ち上げた途端に起爆するようセットされていたのである。警察は犠牲となった二人の共通点を探したが、ともに家族ぐるみで地元のモルモン教会の熱心な信徒だったことを除けば、特にはっきりしたつながりは見当たらなかった。

ところが、翌日に3つめの爆発事件が起きる。今度は自家用車内の爆発で、中にいたのは何とマーク・ホフマンその人であった。車は屋根が吹き飛んで大破したが、ホフマンは重傷を負いながらも奇跡的に生き延びた。病院で警察の事情聴取を受けた彼は、はじめ誰かが自分の車に爆弾を仕掛けたのだと主張した。だが、その説明は曖昧で、妙に逃げ腰などところがある。取り調べが進むにつれて、彼の立場は第3の犠牲者から第1の被疑者へと変わっていった。家宅捜索の結果、爆弾は3つとも彼が自宅の地下室で作製したものであることが判明する。3人目の標的へ爆弾を運ぼうとしていた彼は、愚かにも道中でそれを暴発させてしまったのである。

実は、爆弾の犠牲となった二人は、その少し前にホフマンからある古文書を4万ドルという値段で買い取っていた。それは、モルモン教会が発足した1830年当時にかかれた手紙で、創設の経緯について教会の公式見解とは異なる事実を述べたものである。その奇矯な内容から「白サンショウウオ書簡」という名で呼ばれるようになったこの文書は、要するに同教会のスキャンダルをほめかすものだった。真偽のほどはともかく、二人は教会の名誉を守るためにそれを買い取り、教会に寄贈したのである。

教会はその手紙の真贋を調査すべく連邦捜査局（FBI）に提出しており、近々マサチューセッツから筆跡鑑定の専門家が調査にやって来るようになっていた。それを知ったホフマンは、二人を殺害して口封じと捜査の攪乱をしようと企んだのである。つまりこの手紙は、スキャンダルを怖れる教会から金をゆすり取るための偽造文書だった。

3.

当然のことながら、彼のもう一つの大発見である「自由公民の宣誓」についても、再調査が行われることになった。その結果、ホフマンの偽装工作の詳細が明らかになってゆく。その手練手管は、まことに見事としか言いようがない。

彼はまず、同時期に同じ印刷機で刷られた『詩篇歌集』のコピーから、一字ずついいねいに活字を切り出してきた。宣誓の文言そのものは知られているので、それに従って活字を並べれ

ば、申し分のない印刷用の原版ができる。次いで、地元のブリガム・ヤング大学図書館に所蔵されていた本物の17世紀の古書から、何も印刷されていない白紙の見返しページをそっと切り取り、それに注意深く印刷した。「宣誓」は書物ではなく1頁だけの文書なので、原紙は1枚あれば足りるのである。実に巧妙な手口だった。

古文書の偽造でしばしば疑われるのは、印刷に使われるインクである。ホフマンは、もちろんそのことを知悉していた。そこで彼は、まず同じくらい古い時代の本を燃やして炭を作り、これに古いなめし革を茹でて抽出したタンニン、亜麻仁油、そして蜜蠟みつろうを加えた。こうすると、20世紀初頭まで一般によく使われていた鉄とガロタンニン（加水分解型タンニンの一種）製のインクができるのである。アメリカ議会図書館の専門家も、全米古文書協会の専門家も、文書の材料科学的な予備調査を行った段階では、贋ものだと疑う理由を見つけれなかったが、それもこうした工作の成果である。

ホフマンは他にも研究を重ね、精巧な偽造の技術を体得していた。歴史を学んで文書の背景や周辺事情に親しみ、大学の講座を履修して羽ペンを使った美しい手書き書体の作法を身につけた。黒い鉄分を酸化させて茶色っぽく見せるため、アイロンをかけたたり過酸化水素などの化学薬品をかけたたり、はてはインク処理の薬品が紙の中へと浸透するのを助けるために、紙の裏から掃除機をあてて吸い取ったりすることも学んだ。

古文書の準備だけでなく、それを発見した時のストーリーも、完璧に仕立て上げてあった。彼は、マンハッタンの古書店でそれを購入した際の領収書まで手に入れてあったのである。そのために、彼はまず自作の「自由公民の宣誓」文書を印刷し、それに鉛筆で「25ドル」という殴り書きを加えた。そして市中の古書店へと出掛け、それを見つけたふりをして何食わぬ顔で25ドルを払い、領収書の但し書きに「自由公民の宣誓」の代金として、と記入してもらったのである。入手の経緯を尋ねられた時には、この領収書をひらりと見せればよいだけである。まるで詐欺師の映画を観るように見事なお手並みである。

4.

だが、ここまで完璧だったホフマンも、ある小さな誤りを犯していた。それは、活字の並べ方である。英文の活字には、gやyのように下に突き出る文字もあれば、bやdのように上に飛び出る文字もある。件の文書をよく見ると、上と下の行でその両方が重なりかけているところがある。活字組みの技術が未熟な時代には、それもまったくあり得ないことではなかったらしい。しかし、いったん疑義が生じると、さらに慎重な科学的分析が加えられることになる。彼の職人技には次々に粗いところが見つかっていった。長い年月を経て染みこんだインクなら全方向へと広がるものだが、薬品や掃除機で処理したインクは、一方向にしか広がっていなかった。古めかしく見せるためにヤスリをかけた紙の表面には、顕微鏡で見ると、尖ったもので

傷つけた跡が無数に残っていた。

こうして彼は、偽造を認めざるを得なくなり、爆弾による殺人罪でも逮捕されることになった。ちなみに、彼の偽造工作がここまで詳らかになっているのは、アメリカでよく用いられる「司法取引」という制度のおかげである。彼は、死刑を免れることを条件に、これらすべてをさらさらと自慢げに自白したのである。希代の偽造職人マーク・ホフマンは、かくして釈放なしの終身刑を言い渡され、現在もユタ州の刑務所に収監されている。意外とお粗末なオチである。

アメリカの知的伝統には、昔からときどきこのような詐欺師が登場する。緻密で大胆不敵、相手を騙すばかりでなく、自分自身もその騙しのテクニックに酔ってしまうような人物である。これを「コンマン」という。“confidence man”の略だが、こうして見ると、その“confidence”には二つの意味が含まれているように思われる。一つは、相手の「信頼」を得るという意味である。騙すには、まず信じてもらわねばならない。だから身なりやふるまいなどの外見にも気を遣い、相手を魅了しようと努力するのである。もう一つは、自分自身への「信頼」である。これだけ大きなコン・ゲームをやっているには、よほどの自信が必要である。大舞台で顔色一つ変えずに危険を冒す度胸も必要だろう。

それらに加えてもう一つ、いや何よりも必要なのは、入念な準備と計画を行うだけの優れた知性である。コンマンは、暴力や腕力によらず、ひたすら自分の知力だけで勝負する、というのが鉄則である。すでにおわかりのように、偽造や詐欺もこのレベルになると、人文科学や社会科学だけでなく、自然科学の広汎な知識が必須である。もしホフマンがあれだけの知識や努力をもう少し別の方向に振り向けていたなら、彼はひとかどの人物になっていたかもしれない。肝心なのは、優れた知性を何のために使うかである。

5.

ところで、問題となったその「自由公民の宣誓」という文書は、いったいどういうものだろうか。それを理解するために、ホフマンよりもう少し深く17世紀の歴史をふりかえてみよう。

イギリスは、ヘンリー8世の離婚問題を機にローマ・カトリック教会と袂を分かち、独自の国教会制度を発足させた。宗教改革後のプロテスタントに近づきつつも、カトリックとプロテスタントの中間をゆく「イングランド国教会」(The Church of England)という道を選んだのである。小さな島国であるイギリスにとって、ヨーロッパ列強間の宗教対立に巻き込まれないために、この中道路線(via media)は最善の策だったかもしれない。だが、国内ではそれに不満な人びとも多かった。「ピューリタン」とは、この中途半端な宗教改革を徹底させ、イギリスの教会をプロテスタント的に純化する(purify)ことを目指した人びとのことである。

多くのピューリタンは国内の改革を願い、やがて革命に至るのだが、なかには改革に見切りをつけ、当時始められたばかりの新大陸への植民事業に乗り出す人びとも出てくる。そのうち、1620年に「メイフラワー号」でやってきた人びとは特に「ピルグリム」と呼ばれ、その後の歴史によく知られるようになった。その10年後には千人規模の人びとが到着して、新たにマサチューセッツ湾植民地を始める。前述の日記を書いたジョン・ウインスロップは、ロンドンで出発前に同植民地の初代総督に任ぜられ、この大移住を指揮したピューリタン指導者である。

本国では、議会と国王との対立で政情不安が増しており、植民地の法的な地位もまだ不安定だった。本国政府からすると、移住していった人びとは、国教会というイギリスの宗教体制を批判して、いわば祖国を捨てて出て行った人びとである。彼らの宗教批判が、いつ政治批判に転じないとも限らない。だから本国の政府は、植民地のふるまいに疑念の目を向けていた。

こうした状況にあって、植民地の政権当局が住民の結束を固める手段として提案したのが、宣誓である。この宣誓には、同地に居住するすべての成人男性が署名することを求められた。内容は、互選により構成された植民地政権に忠誠と義務を尽くすこと、もし誰かが反乱や騒動を企てていることを知ったなら、直ちに通報すること、などである。

同様の文書は、イギリス本国でも作られたことがある。宣誓はそれに倣ったものだが、植民地では国王への忠誠の代わりに、新しい政治共同体への忠誠が求められた。政治思想的に言えば、これは「王の臣下」から「自律共同体の市民」へという大きな転換を意味する。やがてその百数十年後に、この転換はアメリカをイギリスから分かち、王や貴族のいない市民の共和国アメリカを形づくることになる。そのような歴史的一歩として、宣誓はけっして悪いものではなかったはずである。

6.

ところが、この宣誓に強く反対した人物がいる。ロジャー・ウィリアムズ（1603-1683）という名の若きピューリタンである。彼は、ロンドンに生まれ、ケンブリッジ大学を卒業後、アメリカに渡ってきたばかりだったが、到着直後から植民地の政権に対していくつかの異議を申し立てていた。その一つが、宣誓への反対である。

ウィリアムズが反対したのは、宣誓の内容ではなく、それを全住民に要求したことである。当時のことであるから、宣誓にはその保証者として、またその遂行の扶助者として、神の名が用いられていた。だから宣誓は一つの宗教的行為である。ウィリアムズは、政府がそのような宗教的行為を全住民に押しつけることは、良心の自由を侵害する行為だ、と批判したのである。信仰は、各人がみずからの魂の深みにおいて決めるものである。住民の中には、政府と違う信仰をもつ者もあるだろうし、そもそもキリスト教徒でない人がいることもあるだろう。だから政府がそのような宗教的行為を強制してはならない、というのである。

結局、この計画は中止に追い込まれた。ウインスロップをはじめとする植民地の政権担当者は、さぞ困惑したことだろう。体制の引き締めを図ったのに、かえってそこに亀裂が入ってしまったからである。

ただし、植民地ではもう少し対象を限定した宣誓が入植当初から実施されていた。それが「自由公民の宣誓」である。最初期に用いられたウインスロップの手書き草稿も残っているが、後には印刷されるようになった。ホフマンが偽造したのは、この最初の印刷文書である。

マサチューセッツ湾植民地の人びとは、大きく分けて「自由公民」(freeman)とそれ以外の「一般住民」(inhabitant)に区別される。自由公民は、定住権をもつ者のうち、信仰の告白をしてピューリタン教会の正規会員となった者だけがなれる、という仕組みだった。植民地の「総会議」に参加し、発言や投票をすることができるのは自由公民だけである。つまり、教会員でなければ、市民としての権利を十分にもつことができなかったのである。

現代の視点からすると、この慣行はやや閉鎖的で非民主的に見えるかもしれない。だが、歴史的文脈のなかではまったく逆の評価になる。というのも、それ以前の「公民」は、家柄のよい貴族か財産のある金持ちに限られていたからである。ピューリタン社会では、財産が少なくても信仰さえあれば、誰でも教会員になり公民になることができた。この制度は、住民の政治参加の機会を大きく広げる役割を果たしたのである。実際に、17世紀のある町では、住民の9割が公民だった、という記録も残されている。

家柄や財産だけではない。初期のピューリタン教会では、人種の違いも乗り越えられることがあった。ウインスロップの日誌によると、1641年には「ニグロのメイド」が教会の正会員になっている。おそらくこれは特殊なケースだろうし、女性である以上、教会員になっても公民資格は得られない。だがそれでも、ここにはその後のアメリカが辿った苛烈な人種差別社会への道とは違う可能性が開けていたように見える。

公民資格は、本国の政治情勢にも翻弄された。1660年に王政復古となり、さらに名誉革命を迎えると、植民地にはようやく国王からの特許状が再交付される。しかしそこには、公民資格として、教会員であることの代わりに「40ポンド以上の財産をもつこと」(freeholder)が定められていた。ピューリタンが理想とした社会の建設からは、大きな後退である。

7.

宣誓に反対したロジャー・ウィリアムズは、他にも物議を醸す主張をいくつか繰り返している。なかでも、土地所有に関する彼の言葉は、注目に値する。植民地は、国王の特許状によりアメリカの土地を所有していたのだが、ウィリアムズは「イギリス国王にそんな権利はない」と主張したのである。土地の真の所有者は、先住民である。だからわれわれは、先住民との交渉により、彼らから土地を譲り受けなければならない、と彼は論じた。

これも現代的な感覚からすれば至極当然の道理だが、西洋文化を基準にものを考えていた当時の人びとにとっては、驚天動地のことだったに違いない。ここには、先住民の駆逐という「アメリカの原罪」が顔を出している。われわれはここで、入植後まもないアメリカに、そのことを強く意識していた人間がいたことを知る。

ウィンスロップら政権担当者は、どうしたか。結論から言えば、彼を追放処分にしたのである。植民地は、法的にも政治的にも未だ不安定な状態にあった。本国は、彼らの宗教的な異議申し立てが、やがて政治的な異議申し立てに発展するのではないか、という疑念を抱いていた。そんなところへ、国王の権威を真っ向から否定するような人物が現れ、それを放っておいたとなれば、植民地そのものが反逆罪に問われてしまうことだろう。植民地政権は、そのような不穏分子を容認しておくことはできなかった。

こうしてウィリアムズは、真冬のニューイングランドを一人さまようことになる。1636年のことである。イギリス人社会から追放された彼を受け入れてくれたのは、以前から交流があり、お互いに深い心の信頼で結ばれていたナラガンセット族の人びとだった。やがて彼はその先住民に対価を払い、正式な契約を交わして土地を譲ってもらい、新しい植民地を建設する。それが、今日のロードアイランド州の始まりである。アメリカ合衆国でいちばん面積の小さな州だが、その歴史的意義はとてつもなく大きい。

先住民と共に暮らしたウィリアムズは、『アメリカ語理解の鍵』(*A Key into the Language of America*, 1643)を遺している。もちろん、ここに言う「アメリカ語」は英語ではない。「アメリカ人」とは先住民のことである。同書は、名詞や動詞といった文法よりも彼らの日常生活を詳細に解説することを目的とした会話体の案内書で、今日でも先住民言語の貴重な研究史料となっている。

ウィリアムズが先住民から学んだのは、言葉だけではなかった。同書は、先住民の文化に対する深い理解と尊重に貫かれている。彼らは、自分たちの理解できないイギリス人の神や礼拝にも敬意を払う。そういう彼らの「礼節」(civility)を知ったウィリアムズは、イギリス人同胞にも同じようにふるまうことを求めた。イギリス人は、文明(civilization)の中に暮らしているが、はたして礼節を弃えていると言えるのか。彼らを「異教徒」と呼ぶあなた方は、洗礼を受けたというだけでキリスト教徒なのか——キリスト教の内部で「カトリックだ、プロテス

タントだ」と争っている本国の人びとに向かって、ウィリアムズはこう尋ねたのである。そして、文化の違いにかかわらず、すべての人がもっている良心の自由を尊重すべきことを論じた。そのなかには、ユダヤ教徒やイスラム教徒、それ以外の宗教を信ずる人やそのいずれも信じない人が含まれる。彼にとってそれは、異なる価値観や世界観をもった人がともに一つの社会を建設するために、どうしても必要な原理であった。

8.

ウィリアムズは、全住民でなく「自由公民」だけに求められる宣誓にも反対を表明している。こちらは対象が教会員に限定されているので、信仰の押しつけという問題はないはずである。しかし、ウィリアムズの考えは違った。宣誓をする本人の信仰がどうであろうと、それは政治権力が宗教を利用することに変わりはないからである。旧約聖書の十戒にある通り、「神の名をみだりに唱えてはならない」（「出エジプト記」20章7節）。たとえキリスト教徒が自分の信仰に従って宣誓をするにしても、政府に求められてそうするならば、それは世俗的な目的のために神を利用することになる。だからやはりそれは許されない、ということである。

ウィリアムズの信念は、今日の言葉で言えば政教分離と信教の自由の明快な表現になっている。信教の自由を守るためには、政府はいかなる意味においても個人の信仰に介入すべきではない。政府が特定の宗教に肩入れすることは政教分離違反になるし、政府が個人の信仰に介入して宗教を世俗的な目的のために利用することは信教の自由に対する侵害である。彼が建設した新しい植民地では、この信念が明快な政治原則となって政教分離が実現されている。ロジャー・ウィリアムズは、日本ではほとんど知られていないが、ジョン・ロック（1632-1704）より半世紀も前に、政教分離と信教の自由を唱え、唱えるだけでなくそれをみずから体現した歴史的先駆者なのである。

特に留意しておきたいのは、ウィリアムズがこのような主張をするに至った根本の動機である。彼は、宗教的宣誓に反対したが、それは宗教の軽視や排除のゆえではない。むしろ、燃えるような宗教的熱心からそう主張したのである。彼は、無宗教や無神論の人びとも完全に平等な市民である社会を求めたが、それは自分が無宗教や無神論だからではない。自分にとって自分の信念が大切なことから、他人にとってもその人自身の信念は大切であるに違いない、という深い宗教的確信からそう願ったのである。

巷でよく聞かれるのは、「無宗教の人は寛容で、宗教に熱心な人は不寛容だ」という声である。もしそう思っている人があれば、ぜひこのロジャー・ウィリアムズという人のことを知ってもらいたい。無関心から来る寛容は、ひとたび大きな嵐がくると、たちまち不寛容な容貌を露わにする。だが、信仰の確信から生まれる寛容は、筋金入りである。

9.

宗教的な宣誓に対するウィリアムズの抗議は、その後もアメリカの法的伝統に生かされている。やがて「独立宣言」により、「アメリカ」は地名から国名へと変わった。その際に制定された憲法にも、ウィリアムズの影はほの見えている。

アメリカ合衆国憲法の第六章三項には、官職に就く資格条件として「宗教上の審査」(religious test)を課してはならないことが明記されている。つまり、大統領や上下院議員になる時に、その人の宗教を問うてはならない、ということである。だから、アメリカの大統領や議員には、原則としてどんな宗教の人でもなれるし、宗教を信じない人でもなれる。

大統領や上下院議員、行政官や司法官は、就任にあたって憲法を擁護することを宣誓しなければならないが、憲法には「宣誓」(Oath)の代わりに「確約」(Affirmation)を選ぶこともできることが定められている。これは、「クエーカー」と呼ばれる宗派の人びとが幾多の迫害を受けながら実現させていった制度で、趣旨はウィリアムズの考えと同じである。就任する人のなかには、「宣誓」という行為の宗教的な含意を好まない人がいるかもしれない。そういう人でも、非宗教的な方法で「確約」をすればよい、というオプションである。実際に、歴代大統領の中でも、第14代大統領フランクリン・ピアース(在任1853-1857)のように、クエーカーではないが、就任式に際して「宣誓」ではなく「確約」を選んだ人がいる。

アメリカ合衆国では、4年ごとに大統領の就任式が繰り返される。われわれはそこで、宣誓に際して聖書が使われるのを何度も見ているせい、それが決まり事であるかのように思い込んでしまう。この誤解は、残念ながらアメリカ国民にも少なくない。しかし、憲法にそのような規定はないし、むしろそんな規定を作ってはならない、というのが憲法の定めである。二百数十年も前に制定された憲法にこのような道が用意されていた、ということは実に驚きである。

次の問題（1－40）には、それぞれ a, b, c, d の答えが与えてあります。
各問題につき、a, b, c, d のなかから、最も適切と思う答えを1つだけ選び、
解答カードの相当欄をマークして、あなたの答えを示して下さい。

例 (H)

(a) (b) (c) (d)

-
1. 当時の英国教会について叙述したものとして正しいのは、以下のうちどれか。
 - a. イングランド国教会は、もともとローマ・カトリック教会に属していた。
 - b. イングランド国教会は、ルターやカルヴァンに先だって宗教改革を進めた。
 - c. イングランド国教会発足の契機となったのは、ヘンリー8世である。
 - d. アメリカ大陸への植民事業は、イングランド国教会の伝道活動の一環であった。

 2. 「ひとかどの人物」という際の「ひとかど」について、正しいのはどれか。
 - a. 「一角」とも書き、有能だがやや性格にとげのある人物、という意味
 - b. 「一徳」とも書き、平均的な人間の能力を超えて優れている人、という意味
 - c. 「一門」とも書き、特定の流派や宗派に属するその道の達人、という意味
 - d. 「一廉」とも書き、ある事柄や分野について優れている人、という意味

 3. 2013年に競売にかけられた1640年版の『詩篇歌集』について、以下のうち正しいものはどれか。
 - a. 競売にかけられたのは偽造品で、真正な本物はまだ見つかっていない。
 - b. 熟練した印刷工により作られた美しく正確な組版だった。
 - c. それまでに競売にかけられた15世紀のゲーテンベルク『42行聖書』よりも高価だった。
 - d. 「メイフラワー号」に乗ってきたピルグリムが持参した由緒ある書物である。

4. 1640年に出版された『詩篇歌集』について、資料から推測できることは以下のうちどれか。
- a. 1640年にイングランド政府の検閲を受けて出版が許可された。
 - b. ピューリタンの礼拝において詩篇を歌うことはとても重要である。
 - c. ピューリタンはカトリック教会の詩篇歌集を継承して使用していた。
 - d. 米国議会図書館も所蔵していないほどの稀覯図書である。
5. 政教分離は、現代の立憲国家では重要な憲法原則とされているが、17世紀のイギリスでは危険思想と考えられていた。その理由としてもっとも適切と思われるのは、次のうちどれか。
- a. イギリスの国教会制度では国家の長と教会の長が同一人物であり、政教分離の主張は教会に対する国王の主権を否定することにつながるとみなされたから。
 - b. 政治と宗教の分離を主張することは、1215年の「マグナ・カルタ」において保障されたイギリス古来の国王と貴族の権利を侵すものと受け止められたから。
 - c. 当時のイギリスでは、国王を処刑し、護国卿となって独裁体制を敷いたオリバー・クロムウェルが完全な政教分離を主張したと見なされていたから。
 - d. 本国の国教会制度の下で迫害を受けたピューリタンは、新大陸に移住して宗教的な迫害のない新しい国家を建設しようとしており、国家反逆罪に問われる可能性があったから。
6. 「自由公民の宣誓」がもつ政治史的な意味とは何か。
- a. イギリスでは臣下が国王に忠誠を誓うことが普通だったが、新大陸で忠誠の対象とされたのは国王ではなく自治組織としての市民共同体であったこと。
 - b. いまだ英国領であった植民地で英国王への言及がなされておらず、人びとの間に新しい国家として独立する気運が高まっていたことを示していること。
 - c. 宣誓が住民からの反対にあって結局実施されなかった、という市民の反対運動の成果を示しており、現代の民主国家における市民的不服従の先例となったこと。
 - d. 宣誓という宗教的な儀式がすべての住民に要求されたため、貴族と平民という身分上の区別が乗り越えられ、新しい平等な社会の建設に寄与したこと。

7. アメリカ合衆国「ロードアイランド州」の説明として正しいものは、以下のうちどれか。
- a. 最初の知事は、ロジャー・ウィリアムズである。
 - b. 州都は、ソルトレイクシティである。
 - c. 1636年に州として正式に認可された。
 - d. ハワイ州よりも面積が小さい。
8. アメリカ大陸に展開したイギリス植民地で印刷され、現存が確認されている最古の文書は何か。
- a. アメリカ語理解の鍵
 - b. 詩篇歌集
 - c. 自由公民の誓約
 - d. 忠誠の宣誓
9. ピルグリムの入植とマサチューセッツ湾植民地の入植について、正しいのはどれか。
- a. ともに1620年の出来事である。
 - b. ピルグリムの入植した土地がマサチューセッツ湾植民地だった。
 - c. ピルグリムは、マサチューセッツ湾植民地への入植に倣って移住した。
 - d. 二つの入植の間には10年の開きがある。
10. ジョン・ウインスロップについて、正しいのはどれか。
- a. 植民地総督として詳細な日誌をつけ、後世に遺した。
 - b. 全成人男性の宣誓を計画して実施した植民地政権の担当者である。
 - c. マサチューセッツ湾植民地に到着後、同植民地の初代総督に選出された。
 - d. メイフラワー号に乗って移住したピルグリム集団の指導者である。

11. 資料によると、17世紀アメリカのピューリタン社会を正しく描写しているのはどれか。
- a. 黒人も洗礼を受けて正規の教会員となることができた。
 - b. 所有する財産の多寡によらず、女性も平等に参政権を有していた。
 - c. それ以前のイギリス社会に比べて、住民の政治参加率が低い傾向にあった。
 - d. 定住権をもっていたのは、ピューリタンと呼ばれる人だけだった。
12. ウィリアムズが見たイギリス人とアメリカ人の比較について、もっとも正しいと思われるものは以下のうちどれか。
- a. アメリカ人は英語ができないので、イギリス人の信仰に敬意を払わない。
 - b. イギリス人は civilization を、アメリカ人は civility を知っている。
 - c. イギリス人はキリスト教徒だが、アメリカ人は異教徒である。
 - d. イギリス人はプロテスタントなので、アメリカ人よりも文明的である。
13. ホフマンが作製した爆弾に水銀が使われた理由で、もっとも重要と思われるのはどれか。
- a. 体温計などに多用されており、大量に入手するのが容易であること。
 - b. 導電性の金属のうち、融点が低く、常温で液体であること。
 - c. 無機水銀なら、人体への毒性が少ないと考えられたこと。
 - d. 錬金術の知識により、悪を封じる魔力が宿っているとされたこと。
14. 米国議会図書館や全米古文書協会の専門家たちは、なぜホフマンの文書が贋作であることを見抜けなかったのか。
- a. ウィンスロップの日誌に記載されていることを読み違えたから。
 - b. 人文科学的なテキストの分析や社会科学的な権力構造の分析を怠ったから。
 - c. ホフマンが発見時の領収書を示し、購入の経緯を明快に説明したから。
 - d. 本調査に入る前の段階で、材料科学的な予備調査だったから。

15. 資料から推測すると、アメリカ史における詐欺師が必ず備えていると言えないのは、以下のうちどれか。
- a. 相手を困らせてやろうという底意
 - b. 周到な計画を立案する意欲と広汎な知性
 - c. 平静を装って虚構を展開する大胆さ
 - d. 見た目や語り口が洗練された魅力的な人柄
16. ホフマンの偽装工作について、もっとも正しく描写していると思われるのは、以下のどれか。
- a. 17世紀の本を燃やして炭を得たのは、放射性炭素 14 による年代測定を考慮してのことだったが、炭素 14 の半減期は 50 万年以上あるので、その心配は杞憂だった。
 - b. 彼が発見したと言われる古文書のすべてが偽造だったかどうかは不明だが、教会の名誉を守るために貴重な史料を関係者に安価で売却したことは彼の善意だった。
 - c. 「自由公民の宣誓」事件については、ほとんど完璧なコンマンだったと言えるが、「白サンショウウオ書簡」事件については、コンマンの定義からは大きく外れる。
 - d. 本人は熱心に大学の授業を履修しており、ニューイングランドの歴史に関しても十分な知識をもっていたが、17世紀のインク製造技術があまりに高度だったので、それを正確に再現することができなかった。
17. 以下のうち、資料から推測できる事実はどれか。
- a. F B I は、以前からモルモン教会の不祥事を捜査していた。
 - b. ブリガム・ヤング大学は、ホフマンの偽造工作に加担していた。
 - c. ホフマンの偽造文書からは、蜜蝋の成分が検出された。
 - d. ホフマンは、マサチューセッツの大学を卒業していた。

18. ホフマンが「自由公民の宣誓」の偽造に使わなかったものはどれか。
- a. アイロン
 - b. 亜麻仁油
 - c. 掃除機
 - d. 羽ペン
19. 資料によると、25 ドルの領収書について正しいのはどれか。
- a. その領収書の検証でホフマンの偽造が露呈したわけではない。
 - b. その領収書は古書店に雑然と積まれていた古文書の山の中から発見された。
 - c. その領収書は本物だが、ホフマンは25 ドルを支払わなかった。
 - d. ニューヨークの古書店は領収書を発行しなかったので、偽造である。
20. 「コンマン」について、資料の理解にもっとも近いものはどれか。
- a. 観客の喝采を得ることを喜びとしており、現代の劇場型犯罪者の原型となった。
 - b. 巧みな計画を実行してスリルを楽しむが、必要とあれば最後には暴力を用いる。
 - c. 自分の手練手管に自分でも心酔しているため、それを説明することに喜びを感じる。
 - d. 名称の由来は、自己の成功に絶対の信頼をもつという意味の“control”である。
21. 「ピューリタン」の包括的説明としてもっとも適切なものは、以下のうちどれか。
- a. イギリス国内の改革に見切りをつけてアメリカ大陸へと渡った人びと。
 - b. イングランド国教会をカトリック的に純化することを求めた人びと。
 - c. 中途半端な教会改革を徹底することを求めた人びと。
 - d. メイフラワー号に乗ってやってきた「ピルグリム」と呼ばれる人びと。

22. 「自由公民の宣誓」の説明として適切なのは、以下のうちどれか。
- a. 1639年以前にも実施されていた。
 - b. 一般住民用に企画されたが結局実施されなかった。
 - c. 居住権をもつ住民であれば女性にも求められた。
 - d. 宣誓でなく確約をもって代用することもできた。
23. 文中に出てくる“freeman”と“freeholder”の違いの説明として、もっとも適切なのは以下のうちどれか。
- a. 当時の記録によると、「ニグロのメイド」は前者になることができたが後者にはなれなかった。
 - b. どちらも自由公民という意味だが、後者はイギリスの名誉革命後には重視されなくなった。
 - c. 前者はピューリタン教会の正会員であり、後者は一定以上の財産をもつ住民である。
 - d. 前者より後者の方が、ニューイングランド社会が目指していた建設の理念に近い。
24. ロジャー・ウィリアムズによると、アメリカの土地の真の所有者は誰か。
- a. イギリス国王
 - b. カトリック教皇
 - c. 最初の発見者
 - d. 先住民
25. マサチューセッツ湾植民地がロジャー・ウィリアムズを追放する際に、理由とならなかったのは次のうちどれか。
- a. イギリス国王の権威を否定したこと
 - b. 植民地政府の求める宣誓に反対したこと
 - c. 植民地全体が反逆罪に問われる可能性があったこと
 - d. 先住民と深く交流をもち、彼らの居住地に住んだこと

26. ロジャー・ウィリアムズが誓約を課すことに反対した直接の理由は何か。
- a. 自由公民でない人にも、宣誓すべき人が含まれていたから。
 - b. 政治権力が個人の信仰に介入し宗教を利用することになるから。
 - c. 宣誓の内容に、神の名が含まれていないから。
 - d. 宣誓を求められている人の中に、プロテスタントでない人がいたから。
27. ジョン・ロックは「寛容についての書簡」(1685年)において、為政者が国民の宗教や礼拝の問題に介入することを戒めたが、カトリック教徒やイスラム教徒や無神論者を市民的寛容の対象から除外した。資料により、ロジャー・ウィリアムズとの比較をした場合、以下のうちもっとも適切と思われるのはどれか。
- a. ウィリアムズはカトリック教徒とイスラム教徒を受け入れたが、無神論者を排除する点ではロックと同様である。
 - b. 神学者だったウィリアムズは、哲学者だったロックよりも信仰心が強く、そのためどうしても他宗教の信者に対して閉鎖的にならざるを得なかった。
 - c. 政治と宗教の権力を明確に区別する点で、ウィリアムズはロックの政教分離論をほぼ踏襲している。
 - d. ロックは政教分離を論じたが、ウィリアムズはそれを論じるだけでなく自分の植民地で実現させた。
28. 「アメリカの原罪」という言葉は、どのような意味であると考えるのがもっとも適切か。
- a. アメリカ合衆国は新しい楽園の創造として天地の創造に比せられるので、エデンの園におけるアダムの罪が含まれるのは当然だ、という意味。
 - b. キリスト教と文明とはしばしば協働して社会に伝播するものなので、アメリカに伝えられた文明そのものが結局はすべての罪の源だった、という意味。
 - c. 今日のアメリカ合衆国の繁栄の陰に、先住民を駆逐したという初元的な悪が潜んでおり、その罪過は現在でもアメリカの繁栄を享受する者すべてが担わねばならない、という意味。
 - d. 当時のヨーロッパ世界から見ると、アメリカは未開の人種が住む荒野だったので、その野蛮なアメリカ人が犯すさまざまな悪行を一括して表現したもの。

29. ロジャー・ウィリアムズを一言で紹介するなら、以下のどれがもっとも適切か。
- a. 「良心の自由の闘士」
 - b. 「インディアンへの使徒」
 - c. 「イギリス国王からの亡命者」
 - d. 「ニューイングランドの建設者」
30. 資料によると、なぜ印刷機は1638年に新大陸へと秘かに持ち込まれねばならなかったのか。
- a. 高価な印刷機を海外へ持ち出すことを港湾税関が認可しなかったため。
 - b. 出版の取り締まりを強化した政府が印刷所や印刷業者に目を光らせて監視していたため。
 - c. 印刷機は移住者の荷物としては大きすぎ、船員の目を盗んで積み荷に紛れ混ませねばならなかったため。
 - d. 印刷は高度な専門知識と技術を必要とする職業なのに、持ち込んだ移住者がまだ徒弟の身分だったため。
31. 資料が示すロジャー・ウィリアムズ像について、正しいと思われるのは以下のうちどれか。
- a. クエーカーと協働して、宗教的宣誓に対する反対運動に従事した。
 - b. 自分の深い宗教的信念から、他宗教への寛容の原理を導き出した。
 - c. ジョン・ロックと同じく、イスラム教徒を市民社会における寛容の対象から除外した。
 - d. ジョン・ロックに倣って、政教分離と信教の自由を提唱し実践した。

32. 以下の4つの出来事を、歴史的順序に沿って並べ換えよ。

ア：マサチューセッツ湾植民地がロジャー・ウィリアムズを追放する

イ：ロジャー・ウィリアムズが宣誓の実施に反対する

ウ：イギリスでチャールズ2世が迎えられ、王政復古となる

エ：ロジャー・ウィリアムズが『アメリカ語理解の鍵』を出版する

- a. アーイーウーエ
- b. アーイーエーウ
- c. エーイーアーウ
- d. イーアーエーウ

33. ロジャー・ウィリアムズの言語学的な貢献について、正しいと思われるのは以下のうちどれか。

- a. 先住民にキリスト教を伝えるため、彼らの言語を学んで説教し教会を建てた。
- b. 先住民の言語を文法構造から分析し、ヨーロッパ人向けの詳細な文法書を編纂した。
- c. 当時のアメリカ人が使う日常的な英語表現をまとめて出版した。
- d. ナラガンセット族の言語について、今日も参照される貴重な言語的資料を残した。

34. アメリカ合衆国憲法に定められている連邦議員の就任宣誓について、資料から正しいと推測できるものはどれか。

- a. 無宗教の人に限り、「宣誓」を「確約」に変えることができる。
- b. 無神論者が選出された場合には、「確約」をして就任することができる。
- c. クエーカーが上院議員に選出された場合には、「確約」を選ばねばならない。
- d. イスラム教徒が下院議員になった場合も、聖書を用いて宣誓を行わねばならない。

35. 仮に仏教徒がアメリカ大統領に選出された場合、起こり得るのは次のうちどれか。
- a. 自分の信ずる宗派の経典を用いて「宣誓」するか、何も用いないで「宣誓」または「確約」をする。
 - b. 宗教に関する知識を問う試験（religious test）に合格すれば問題なく就任できる。
 - c. 就任宣誓ができないので、そもそも就任することはできない。
 - d. 仏教では経典も多様で、「宣誓」や「確約」という決まりもないので、どちらもせずに就任する。
36. アメリカ合衆国で大統領宣誓式を主宰し、憲法に則って大統領の言葉を受ける立場にあるのは、どのような役職にある人か。
- a. 国務長官
 - b. 連邦最高裁判所長官
 - c. 前任大統領
 - d. 上院議長

37. 以下は、初代大統領ジョージ・ワシントンがクエーカーと呼ばれる人びとの集会に宛てて書いた書簡の一部である。

「政府が設立された目的の一つは、抑圧から人びとの人身と良心を守ることなので、為政者は単に自分が抑圧しないというに限らず、他者にそういう抑圧が起きるのを防ぐという義務も帯びています。自分の良心のままに全能の神を礼拝する、というこの国民的自由は、人びとの最良の祝福でもあり権利でもあります。(中略) わたしは、あなたがたの原理と行動についてよく知っています。国防の責任を他の人と共に担うのを拒むことを別にすれば、クエーカーと呼ばれる人びとほど模範的で有為な市民は他のどの教派にもいない、と言ってよいと思います。そこで、わたしの願うところをあなたがたにはっきりと申し上げておきます。すべての人の良心はていねいに尊重されるべきであり、国家の安全と基本的な利益に反しない限り、法律もまたその人びとの自由を最大限に容認すべきです。」

書簡の趣旨に合致するものは、以下のうちどれか。

- a. あなたがたは、兵役を含む市民的義務をすべて模範的に行っており、他のどの教派の人びとよりも賞賛に値する。
- b. アメリカ合衆国では、市民が各人の良心に従って礼拝する自由は、権利とまでは言えないにせよ喜ばしい祝福である。
- c. 各人の良心については、国家の本質的利益に反しない限り、できるだけ広汎に尊重されるように法律を整備するつもりである。
- d. 政府は、権力であなたがたの良心を抑圧しないよう務めるが、他者がそれを抑圧することまでは防げないので、自衛してほしい。

38. 下記は資料の内容と関わる日本国憲法の条文である。空欄のア～オに入る正しい言葉はどれか。

第19条 思想及び< ア >の自由は、これを侵してはならない。

第20条 < イ >の自由は、何人に対してもこれを保障する。いかなる宗教団体も、国から特権を受け、又は政治上の権力を行使してはならない。

2. 何人も、< ウ >上の行為、祝典、儀式又は行事に参加することを強制されない。

3. 国及びその機関は、宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならない。

第21条 集会、< エ >及び言論、出版その他一切の表現の自由は、これを保障する。

2. < オ >は、これをしてはならない。通信の秘密は、これを侵してはならない。

- a. ア=信教、イ=良心、ウ=宗教 エ=抗議、オ=傍受
- b. ア=信念、イ=信仰、ウ=政治 エ=抗議、オ=盗聴
- c. ア=表現、イ=良心、ウ=政治 エ=芸術、オ=検閲
- d. ア=良心、イ=信教、ウ=宗教 エ=結社、オ=検閲

39. ホフマンの事件では、真相解明のために「司法取引」の制度が利用されたが、この制度の日本への導入状況について、以下のうち正しい説明はどれか。

- a. 東京地方検察庁特捜部は、日産自動車の元社長カルロス・ゴーン氏を刑事訴追するため、同社幹部と司法取引を行い、立件に必要な機密情報の提供を受けた。
- b. 日本では、独占禁止法違反などの組織犯罪を減らすため、企業内部からの自主的な申告を奨励する制度が整備されており、司法取引制度の導入は不要と判断された。
- c. 日本では、有利な取引を引き出すための偽証や冤罪が増えるとの懸念から反対論が強く、検討はされたが結局導入は見送られた。
- d. 日本の司法取引制度は、取り調べの全面的な可視化を条件として、アメリカの制度と同じように殺人などの凶悪犯罪にも適用することが可能となった。

40. 資料を通して著者が訴えている主旨にもっとも近い内容を表現しているのは、次のうちどれか。
- a. アメリカ合衆国は、現在は人種差別の渦巻く不寛容な国だが、歴史資料で客観的に見る限り、かつては差別もなく寛容な国だった。
 - b. 優れた詐欺師となるためには、人文科学・社会科学・自然科学を含む広汎なりべラルアーツの知識をもつことが枢要である。
 - c. 無関心に由来する寛容は容易に不寛容へと転じがちであるのに対し、確固たる信念を基盤とする寛容は歴史や社会を変える原理になりうる。
 - d. ロジャー・ウィリアムズは、先住民こそアメリカ人の原型であることを教えており、社会的格差の解消のためにはジョン・ロックに次いで有意義な原理を提示している。

(このページは空白です。)

(このページは空白です。)

